

ケース5

りんごの聖地を作り出した日系社会と技術協力（吉田 憲）

「石は取り除けばよい。山は削れる。気候は変えられない。この地だ」

海外技術協力事業団の専門家として派遣されていた、後沢憲志博士の一言で、りんごの聖地が決まった。時は 1974 年 4 月。ブラジル南西部サンタ・カタリーナ州、その奥まったところにある寒冷地。山地には、石が散在し、土地利用率低かった地だ。

1908 年ブラジル入植以来、日本人移民は農業従事者が多く、農業大国ブラジルを支えてきた。流通、調理法にも貢献したが、特に「生産規模の拡大」「作物の多様化」「農業地帯の拡散」の面で大きな貢献をしてきた。農作物の種類が極めて少なかったブラジルを日本人移民が新規導入、改良を通じて豊かにしてきた。ジャガイモ、キャベツ、レタス、ピーマン、長ネギ、コショウ、キュウリ、白菜、ゴボウ、イチゴ、ビワ、桃、柿、みかん、ぶどう、梨等々その種類の多さには驚くばかりである。

中でも、日系社会と技術協力が一緒になって打ち立てた「りんご栽培」は特筆に値する。70 年代初頭、りんごの国内消費は約 20 万トン、99%をアルゼンチンからの輸入に頼っていた。アルゼンチンやヨーロッパから時間をかけて輸入されたもので、水分が失われており、病人用にスプーンですくって食べるものだった。

1960 年、南半球最大の農協であった日系農協組合コチア産業組合は、日本政府に対し果樹栽培の指導員の派遣を要請、農林省(当時)は技官を派遣し調査を開始する。

ブラジル政府は国内産業育成、外貨流出を防ぐためにも 64 年改良種の栽培を開始するが、良質な生産に結びつかなかった。

コチア産業組合はブラジル政府を通じて、りんご栽培の専門家を日本政府に要請した。日本政府は、71 年 3 月、青森県りんご試験場で、りんご「ふじ」の育成に貢献があった後沢憲志博士(前長野県園芸試験場長)を派遣した。州立農業試験場に所属し、日系人の「りんご栽培研究グループ」とも意見交換をしながら、各地を視察して回った。そしてとうとう見つけたのが、石ころだらけの一見利用価値のない山地だった。そして、冒頭の一言。

同行した 6 人の栽培研究グループと 3 人農業技師は、驚いたものの、後ずさりにはできない。専門家の言を信じるしかない。ブラジルで唯一雪が降る、標高 1,400m の地だ。

下山後、即、州知事に協力要請する。州知事は、りんご入植者の為に、中央銀行に掛け合い、中央銀行から州銀を通じたブラジル初の土地購入のための農地融資が開始される。

ブラジル政府、サンタ・カタリーナ州政府、日系コチア産業組合、日系社会、そして日本の技術協力、すべてがかみ合い、動き出すことになる。

後沢博士の提案で、品種は「ふじ」種をメインとすることとなった。広大な国土で、日持ちが長く、輸送にも耐えられる品種である。道路、電化工事など営農団地造成に必要な計画・工事も州の支援を得ることができた。74 年 8 月第一回営農団地農地配分抽選、11 月最初の 8 家族入植。75 年～77 年にかけて 4 つの営農団地に 54 区画、440ha に、35 万本が植えられた。

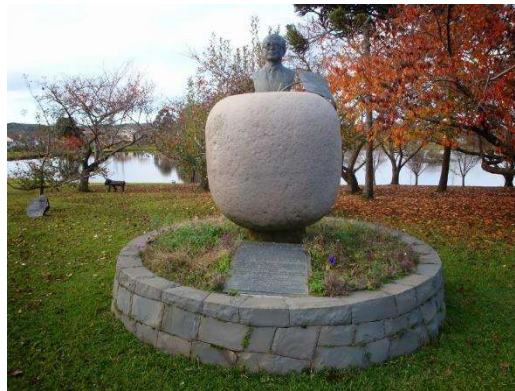
後沢博士は、7年間専門家として活動され、その後15名の専門家が30年間に渡る技術協力を続けた。コチア産業組合は 94 年倒産したものの、同地ではサンジョー日系農協として活動を継続した。現在、日系農家の栽培面積は約 1,500ha まで発展している。そしてブラジル人農家が日系農家に習って 2,000 以上誕生して、栽培面積も 10,000ha に及んでいる。



1980 年 2 月後沢博士による剪定指導（提供：大谷周氏）

組合員・職員は、JICA 日系研修で来日し、「農協運営」「営農指導」等の指導を受けている。また同地に作られた日本語学校には JICA 日系青年ボランティア(現 日系青年海外協力隊)が継続して派遣され日本語、日本文化を伝えている。

1980 年には、青森県とサンタ・カタリーナ州との間で友好協定書が締結された。後沢博士の出身県であり、りんご栽培に関わる専門家の派遣、同州からの研修員の受入れにより、同州のりんごの質・量の向上に青森県が大きく貢献したことをきっかけに、これまで、県・州代表団の相互訪問、水産技術研修員等の受入れ、サッカー・コーチの招へい、児童・生徒絵画 作品の交換などの幅広い交流が続いている。



リンゴの形の大石の上に後沢農博の胸像を乗せた石像
(サンジョアキン農業試験場 EPAGRI の正面入り口の庭)(筆者撮影)

2024 年現在、ブラジルの全国各地のスーパー、果物屋さんでは、りんごは「FUJI」と標記、人々になじみのある果物となっている。また、青森/日本発の品種として、世界最大の生産を誇っている。



ふじがたわになる木(筆者撮影)